

平成24年度 道徳教育指導資料

郷土資料にかかわる実践事例集
【小学校編】

平成 2 5 年 3 月

青森県教育委員会

はじめに

今日、生命尊重の心の不十分さ、自尊感情の乏しさなど子どもの心の活力が弱っている傾向等が指摘されており、道德の時間を「要」として、様々な場面で心を育てることが重要となっております。

県教育委員会としましては、学校教育指導の方針と重点に、「道德教育の充実」を掲げ、道德性の育成に各学校で全力を傾注して取り組んでいただくようお願いしているところであります。

このような中、道德教育の一層の充実に資するため、郷土に視点を当てて作成したのが、この実践事例集です。

その趣旨は、学習指導要領を踏まえ、郷土の先人の伝記や逸話、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材に取り上げ、心に響く授業を行うことによって、二十一世紀に生きる子どもたちの道徳性や郷土に対する誇りと愛着を培おうとするものであり、各学校の実践に活かせる極めて有意義な役割を担うものと考えます。

本実践事例集では前半で、郷土にかかわりのある現在活躍されている人々や先人を題材とした六編及び平成六年度の同事例集に掲載された読み物資料を改訂した六編を掲載しております。また、後半で、各作成委員の実践を基にした活用例を掲載しております。特に、読み物資料に多くのページを割き、写真やイラストを掲載するなど、魅力的な読み物にすることを心がけました。

各学校においては、活用例を参考に、それぞれの学校・家庭・地域の実態に応じて本書を積極的に活用されることを希望します。

最後に、本書の作成に当たって、一年間にわたり御尽力いただきました作成委員並びに関係各位に、心からお礼申し上げます。

平成二十五年三月

青森県教育庁

学校教育課長

成田昌造

目次

第一章 読み物資料

一 「第1学年及び第2学年」		
(1) ぼくのそだったまち	ゝまんが家	馬場のぼるゝ「低学年4―(5)」……2
(2) がんばれの気もちをとどける	「低学年4―(2)」	……6
(3) かにさん「低学年3―(2)」	……	……10
(4) 先生があんだ手ぶくろ	ゝ川村郁ゝ「低学年2―(4)」	……14
二 「第3学年及び第4学年」		
(1) 世界一になるために	ゝ斎藤春香ゝ「中学年2―(3)」	……18
(2) 砂地に緑を 防災林をつくることに一生をかけた人	ゝ石橋健二ゝ「中学年1―(2)」	……22
(3) 虫おくり「中学年4―(5)」	……	……26
(4) おらほのゆうびんやさま	ゝ齋藤大作ゝ「中学年2―(4)」	……30
三 「第5学年及び第6学年」		
(1) 花なき枝に実はならぬ	ゝ徳差藤兵衛ゝ「高学年4―(7)」	……34
(2) チェスボロ―号の遭難	ゝ国境を越えた勇氣と人間愛ゝ「高学年2―(2)」	……38
(3) 星の博士ゝ一戸直蔵ゝ「高学年1―(2)」	……	……42
(4) 手製の赤十字旗	ゝ三上剛太郎ゝ「高学年3―(3)」	……46

第二章 読み物資料の活用例

一「第1学年及び第2学年」

(1) ぼくの そだった まち 〓 まんが家 馬場のぼる 〓 52

(2) がんばれの 気もちを とどける 53

(3) かにさん 54

(4) 先生があんだ手ぶくろ 〓 川村郁 〓 55

二「第3学年及び第4学年」

(1) 世界一になるために 〓 斎藤春香 〓 56

(2) 砂地に緑を 防災林をつくることに一生をかけた人 〓 石橋健二 〓 57

(3) 虫おくり 58

(4) おらほのゆうびんやさま 〓 齋藤大作 〓 59

三「第5学年及び第6学年」

(1) 花なき枝に実はならぬ 〓 徳差藤兵衛 〓 60

(2) チェスボロー号の遭難 〓 国境を越えた勇氣と人間愛 〓 61

(3) 星の博士 〓 戸直蔵 〓 62

(4) 手製の赤十字旗 〓 三上剛太郎 〓 63

付録「道德の内容」の学年段階・学校段階の一覧表 64

「第一章 読み物資料」

ぼくの そだった まち くまんが家^か 馬場^ばのぼる



馬場^ばのぼる^{さん} 「十一^{じゅういつ}ぴきのねこ」という絵本^{えほん}を知^しっていますか。とらねこたいしょうと、十^{じっ}ぴきの元^{げん}気^きなのらねこたちとのゆかいなお話^{はなし}です。

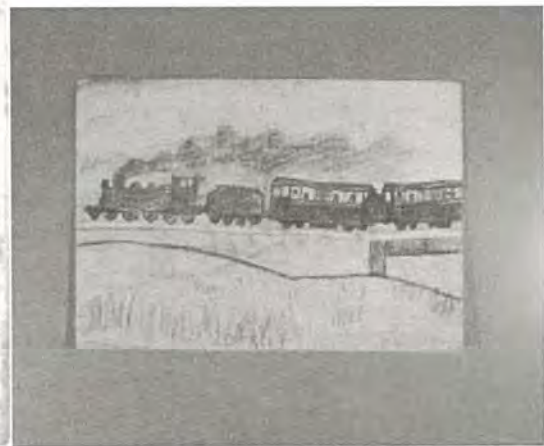


こねのき 1 1 ぴき
この絵本^{えほん}をかいいた馬場^ばのぼる^さは、青森^{あおもり}けんの三戸^{さん}町^{のへまち}に生^うまれ
くました。子ども^{こども}のころから絵^えをか
くのがだい^{だい}すきで、自分^{じぶん}のかいた
絵^えを家に^{いえ}かざっては、かぞくに

見^みせていました。
小^{しょう}学^{がっこう}校^{がっこう}では休^{やす}み時^じ間^{かん}に
なるとノートや紙^{かみ}に大^{だい}す

きな 絵^えを なんまいも なんまいも
かいて いました。

のぼるさんは、自分^{じぶん}が すんでい
る 三戸^{さんのかまち}町の ふうけいが 大^{だい}すき
でした。とくに、家^{いえ}の そばから
見える「名久井岳^{なくいだけ}」や そのむかし
とのさまの おしろがあ
った「城山^{しろやま}」、近く^{ちか}を な
がれる川^{かわ}や はし、りん
ごばたけや てつきよう
などの 絵^えも よくかい
ていた そうです。



のぼるさんが小^{しょう}学^{がっこう}校 3 年^{ねん}生^{せい}の時^{とき}にかいた
「ももたろう」と「れっ車^{しや}」の絵^え



き
もと木たいらのまつなみき
さんのへまち
(三戸町のふうけい)

「自分^{じぶん}が おもしろかった
ことを、子どもたちにつ
たえたい。」
と、話^{はな}していた のぼるさん
は、まんが家^かとして 活^{かつ}やく
した ほかに、絵本^{えほん}も かき、
たくさん の しょうを もら

いました。 のぼるさんは、
「私^{わたくし}が えがく絵^えは、いつも

なぜか 三戸^{さんのへ}の ふうけいに

と、言^いって いました。

のぼるさんを そだてた、ふるさと 三戸^{さんのへまち}町の あたたかな
ふうけいや どうぶつたちは、のぼるさんの 作品^{さくひん}の 中^{なか}に
いつまでも 生^いきつづけて います。



のぼるさんが かいた 青森県文化観光立県宣言記念イラスト

がんばれの 気もちを とどける



へいせいじゅうさんねんがつじゅういちにち
平成二十三年三月十一日、ひがし日本大しんさ
いが あった日のことです。

ひろ子さんの すむ 佐井村には、大きな ひ
がいは ありませんでした。しかし、テレビから
ながれる じしんの あった まちの ようすを
みて ひろ子さんは うごけなく なりました。

しがつ
四月になり ひろ子さんの 学校では、じしん
で こまっている 人たちに なにかできないか
はなしあいを しました。そして、だいを そ
だて、それをとうふにして うることに しまし



た。そのお金を かね じしんで こまっている 小学校 しょうがっこう におくる
ことに きめました。だいずの水 みず やりや 草 くさ とりが 二年生 にねんせい
のしごとに なりました。はなしあいがおわったとき ひ
ろ子 こさんは ちから 力 ちから ぶよく うなずきました。

学校 がっこう の そばの はたけを かり、だいずづくりを かい
しました。ひろ子 こさんたちは、だいずの水 みず やりに まい
日 にち、出 で かけました。

「大きく おお なあれ。だいず だいず たくさん たくさん なあれ。」
小 ちい さな めが で 出 で て、すこしずつ おお 大 おお きく なっていく だい だい
ずに ひろ子 こさんは、こえを かけながら せわを しまし
た。

なつ休 やす みも、だいずの せわが せわが あります。ひろ子 こさんは
まい日 にち はたけを み 見 み に で 出 で かけました。

「ざつ草 そう を そのままに しておくと だいずが おお 大 おお きく
なるのを じやま するんだよ。」

先生の ことばを わすれずに、ひろ子さんは 小さな 草も ていねいにと
ることに しました。草とりは たいへんな しごとです。ひろ子さんは あせが
たくさんで、せ中が いたくなつても 草とりを つづけました。なつ休みの
おわりには、りょう手でも もてないほど たくさんの だいが できました。
ひろ子さんはほっとしました。

ひろ子さんたちは、ちかくの とうふやさんに だいを はこび とうふを
つくってもらいました。

さあ、いよいよ とうふを うる日 です。十時に うりはじめ、一時間も し
ないうちに、たくさんあつた とうふぜんぶが うりきれました。村ちようさんも、
「ありがとうございます。」

といって 五つも かって くれました。ひろ子さんたちは のこった時間で ぼ
金あつめました。ひろ子さんは、ぼ金をしてくれた 一人一人に、

「ありがとうございます。」

と、大きな こえで おれいを いいました。うりばは ひろ子さんたち、そして、
ちいきの人たちの 「ありがとう。」の こえで いっぱいになりました。



あつまった お金^{かね}を、とどけた 学校^{がっこう}の 先生^{せんせい}からお手紙^{てがみ}
が とどきました。

「このまえは、みなさんが あつめた お金^{かね}を とどけて
くださり ありがとうございます。このお金^{かね}は みなさん
が はたらいて あつめた お金^{かね}だと ききました。いた
だいた お金^{かね}は、たいせつに たいせつに 子どもたちの
ために つかいたいと おもいます。」

ひろ子^こさんは、なんども なんども その 手紙^{てがみ}を よみ
かえました。

かにさん

むかし、しもきたのある村^{むら}に きんべ
えさんという りょうしが すんで いま
した。あるとし、さかなが ぜんぜん と
れないので、きんべえさんは、

「なんでも いうことを ききますから、
さかなが たくさん とれる ように
してください。」

と、村^{むら}の りゅうじんさまに おねがいし
ました。

その かえりみち、一^いぴきの かにの 子^こどもが
だに はさまって みうごき できずに いるのを
見^みつけまし 石^{いし}の あい



「かにだって、いのちのある もんだ。よしよし、たすけてやろう。」

きんべえさんは、大きな石をどかしてやりました。

その日のよる、りゅうじんさまから『ねがいをきいてやるかわりに、むすめのおちよをよめにほしい』というしらせがきました。

つぎのあさ、村はたいりょうで、村中おおよろこびでした。でも、むすめのことがしんぱいで、きんべえさんはごはんもたべられませんでした。

よなかになつて、りゅうじんさまがかごでむかえにきて、いいました。

「わしがりゅうじんだ。わしがきたことは、だれにもいくなよ。」

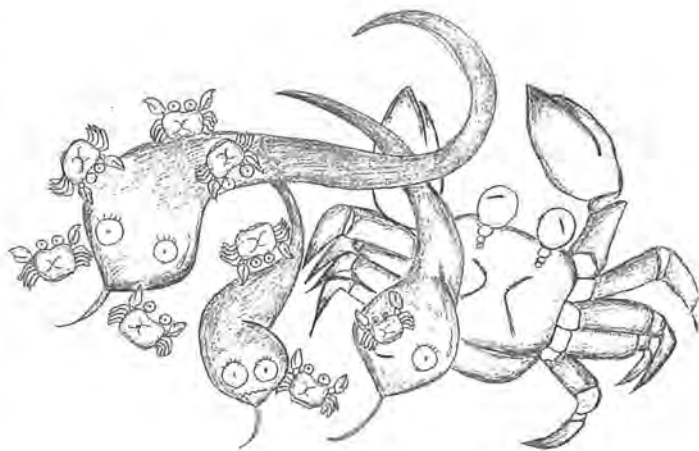
そして、りゅうじんさまは、おちよをつれて、うみのなかに

入^{はい}って いきました。かごの 中^{なか}の おちよは、まどをあけて
みました。すると、りゅうじんの ぎょうれつは、いつのまにか
うみへびの ぎょうれつに変わ^かって いまし
た。しっかりものの おちよも、びっくりし
て、

「たすけてえ、たすけてえ。」
と、大^{おお}ごえで さけびました。

すると、いままで 見^みたこともないような
大^{おお}きな かにが、うみへび めがけてなん
百^{ひゃっ}ぴきも せめよせてきました。一^{いち}ばん
大^{おお}きな かにが いいました。

「おちよさま。わたしは、あなたの おとう
さんに たすけて もらった子^こがにの おや
みへびたちは、りゅうじんさまの なまえを
つかって、わる



い ことを する やつらです。わたしたちが こらしめて
やりましょう。」

うみへびたちは とても おこり、かに
の こうらを ぐいぐいと しめあげまし
た。かにたちも まけては いませんでし
た。こうらを しめられながらも、おお大きな
はさみで うみへびの からだを力ちからいっ
ぱい はさみました。そして、とうとう
かにたちは、うみへびをおいはらって し
まいました。

おちよは いのちが たすかって ほっ
と しました。そして、かえっていくか
にたちが 見みえなく なるまで、いつまでも
ふっていました。 いつまでも 手てを



先生が あんだ手ぶくろ
川村郁

昭和三十年ころのお話です。ピューピュー、つめたいきた風がふいています。雪は、やねより高くつもっています。さむくてさむくて、体もおそろいようです。

ここは、青森県の津軽地方にある、山のおくの小さな学校です。この学校には、先生が一人しかいません。先生の名まえは、『川村郁先生』です。川村先生は、まいあさ、みんながやってくるまえに、きょうしつのストーブに火をいれておきます。みんなのよろこぶかおを見るとうれしくなるからです。

けさも、子どもたちは、ほっぺをまっかにして、ハアハア白いいきをはきながら学校にやってきました。そして、川村先生に、

「おはようございます。」

「先生、おはようございます。」

と、大きなこえで、げんきよくあいさつします。それから、きょうしつのまん中で、あかかともえているストーブのまわりにあつまってきます。





「学校はあつたかくていいなあ。」
「うんだ、気持ちいいなあ。」
みんなであたたまりながら、お話を
するのです。

川村先生は、子どもたちの手にさわ
つてみて、おどろきました。もみじの
ように小さくてかわいい手でしたが、
つめたくて、ひびわれし、かさかさし
ています。ちがながれそうになっ
てる子もいます。

「手ぶくろをはいてこなかったの。」
と、先生はききました。

「ないの。」

「うちで、手ぶくろかえないんだよ。」
「手ぶくろかってもらえないんだけど、

しかたないんだよ。」

と、子どもたちがいいました。

川村先生はびっくりしてしまいました。

（この体もおるようなさむいときに、手ぶくろをはかないなんて。手ぶくろをもっていない子がいるなんて。）

川村先生には、この山の学校にくるときに、じぶんのセーターをあもうとおもって、もってきた毛糸がありました。

（よし、この毛糸で子どもたちに手ぶくろをあんであげよう。）

そうおもうと、その日のばんから、さっそくあみはじめました。くらいランプの下で、せつせとあみしました。

まいばんおそくまで、ときには、ランプのあぶらがなくなっても、きがつかないほ



どでした。

こうして、子どもたちの手ぶくろが、できあがりしました。そして、子どもたちに手ぶくろをはかせてあげました。

「先生、ありがとうございます。とってもあつたかいよ。」

「ありがとうございます。こんどは、ひびわれにならないね。」

と、子どもたちはおおよろこびです。じぶんのセーターができなくても、子どもたちが手ぶくろをはいて、よろこんでいるのを見てみると、川村先生の顔には、え顔が、こぼれるのでした。



世界一になるために

ゝ 齋藤春香 〵
さいとう はるか



齋藤春香さん（前列右）

平成二十年（二〇〇八年）、北京オリンピックでソフトボール全日本チームは世界一になりました。その時の監督が弘前市出身の齋藤春香さんです。

齋藤さんは、平成十八年（二〇〇六年）十二月、ソフトボール全日本チームの監督になりました。監督になる前は、選手としてアトランタ、シドニー、アテネオリンピックに出場し、中心選手として活躍していました。ですから、選手に金メダルをかけさせてあげたいという願いを強くもっていました。

齋藤監督は、世界一になるためにある作戦を考えていました。外国の選手にくらべて、体の小さい日本の選手が勝つためには、チームワークが大切だと思いました。

代表選手が集まって、最初の練習をしたときのことです。練習が終わってミーティングが始まりました。ミーティングというのは、監督やコーチ、そして選手たちがその日の練習のよかったところや悪かったところを話す時間です。だからこの日も、選手たちは、監督の話を聞く準備をして待っていました。

「今日から、ミーティングのやり方を変えます。みんな、まるくなつてすわって。」

選手たちは、言われたとおりにすわりました。監督やコーチはその外側にならんで選手をかこむように立っています。

「じゃあ、今日の練習で気が付いたことや思ったことを話してください。」

斎藤監督は、そう言つてうでを組んでじつと見ています。選手たちはおたがいに顔を見合わせましたが、そのあとだまりこんでしまいました。しいんとした時間だけがすぎしていきます。

「世界一をめざして、何でも言い合つていこうね。」

と、キャプテンがみんなに意見を求めますが、みんな目を合わせずに下を向いてしまいます。五分くらいたって、ミーティングの時間は終わりました。このミーティングは、練習や試合が終わるたびに毎日行われました。はじめのうちは、意見が出ませんでした。が、半年くらいたつと四、五人は思ったことを言い合えるようになってきました。

ある日のミーティングの時、

「何で今日の試合でバントがうまくいかなかったの。バントを成功させるのって、世界一になるためには大事だよ。」

と言って、質問した選手がいました。試合の勝敗にかかわらずとも大事な場面で、何度かバントを失敗して点数が入らなかったのです。自分のミスでバントができなかったことをよくわかっていたので、言われた選手はしゅんとして何も言えません。そんな質問は、今まではだれもしませんでした。すると、別の選手が手をあげて、

「バントの先が下がっていたからじゃない。毎日意識して練習していけばきっとできるよ。」

と、アドバイスを始めました。

「わたしは、かまえを速くするようにしたらうまくいったよ。」

と、別な選手からも声がかかります。さっきまで下を向いていた選手は、顔を上げてみんなの話に、うなずきながら聞き入っています。はじめに質問した選手も、

「やればきっとできるよ。明日バント練習につき合ってあげるから、いっしょにがんばろう。」



と、約束をしてくれました。

次の日。早朝のグラウンドに、一生けん命バントの練習をする選手たちの声がひびいていました。

「ナイスバント。そういう感じでやったらいいよ。」

「今のよかったね。もう一回やってみよう。」

バントが成功するたびに、まわりから次々に声がかかります。それは、監督やコーチに言われたから出している声でなく、心の中からわき上がってくるはげましの声です。みんなの気持ちにこたえようとする選手と、成功を自分のことのように喜ぶ選手たち。

それからというもの、ミーティングでは、守備に対してもきびしい意見が次々に出るようになりました。それは、失敗した選手をせめるという意味ではありません。かわいそうだからとえんりよするのではなく、意見を言い合うことによつて、選手たちは大きく成長することができたのです。

そして、むかえた北京オリンピック。大事な場面で次々とバントを成功させる選手たち。一点差の試合や延長戦を勝ちぬいた「斎藤ジャパン」は、決勝戦でも大接戦の末、見事に金メダルを勝ち取りました。マウンドに集まる喜びの輪の中には、斎藤監督が求めていたチームの姿がありました。

後日、斎藤監督のむねには、大きな金メダルが輝いていました。それは、選手たちが心をこめて作った『世界一の金メダル』だったのです。

すなち
砂地に緑を

ぼうさいりん
防災林をつくることに一生をかけた人

いしばしけんじ
石橋健二

平成二十三年三月の大津波でたおされた三沢市の『海岸防災林』をよみがえらせるために、海に近い町内の人たちが集まりました。みんな、砂地にクロマツのなえ木をうえることにしたのです。

この日、地いきの町内会長をしているおじいさんとさんかしていた四年生の陸君は、いやいやながらお手伝いをしていました。すると、さんかしていた人たちの会話が陸君の耳に入ってきました。

「このクロマツ林が、わたしたちの生活を守ってくれているからね。」
（クロマツ林が、わたしたちの生活を守ってくれる……。どういこうとだろう。）陸君は、この防災林についてもっと知りたくなり、おじいさんに話を聞くことにしました。



この防災林は、昭和八年（一九三三年）に、三沢市出身の石橋健二さんがリーダーとなつてうえ始められました。健二さんが育った三沢は、ヤマセ、飛砂が多く、たびたび津波におそわれる、きびしい自然かんきょうでした。

昭和八年の三月には三陸大津波が三沢海岸をおそいました。

「波が、人も家もすべて持っていつてしまった。」

「それでなくても、ヤマセで気温が低く、作物がとれず、生活が苦しいのに。」

「マツ林でもあつたらなあ。」

「何、夢みたいなことを、砂地にマツが育つわけないじゃないか。」と話す人々は、海岸からはなれた高い所へうつり住みました。それでも、飛砂ひさのえいきょうで田や畑は砂にうまってしまい、作物はとれず、何年も生活はくるしいままでした。

「マツが育てば、飛んで来る砂も少なくなる。つめたいヤマセだって、津波だって少しは防げる。」

健二けんじさんの言葉に、地いきの人たちは、

「そりやマツ林ができれば米や野さいもとれるかもしれないが、砂地に木をうえるのはぜったいにむりだ。もしも、根がついたとしても、強い風が二、三日ふけば、みんな砂にうもれてしまうじゃないか。砂地にマツ林。そんなの神様でもできっこない。」

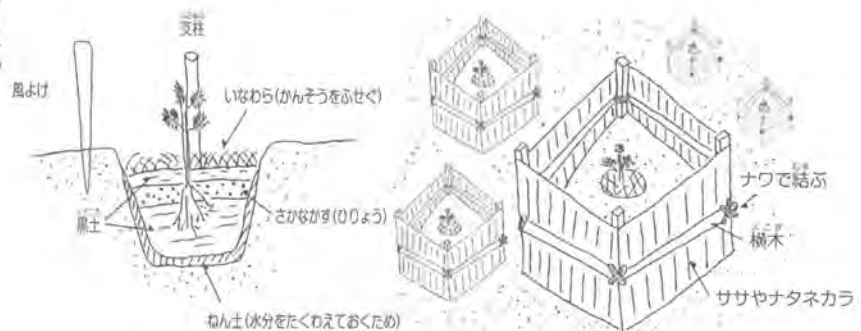
と言って、反対しました。しかし、健二さんはマツ林をつくるための作業を始めました。

よそうどおり、作業はむずかしく、風と飛砂とのたたかいでした。

健二さんは、夜も昼も砂地にクロマツをうえるための勉強をつづけました。そんなある日、

「そうだ、すてられているナタネのからを使ってマツのなえをかこんだり、わらをしいたりして飛砂やさむさをふせげばクロマツを育てることができるかもしれない。」

ちようせんを始めて五年目。健二さんはとうとう新しいうえ方を考え出したのでした。そして、雨の日も、風の日も、砂浜を歩き一本一本マツのようすをたしかめました。



健二さんが考えた方法



「元気に、りっぱに育てよ。」

と、声をかけながら砂浜にやっつとで根づいたクロマツ林を見まわるのでした。

そのよく年、クロマツを育てることにせいこうした健二さんに問題がおきました。それは、「戦争」でした。当時、三沢からも多くの男の人たちが戦争に行きました。クロマツをうるために働く人がいなくなったのです。

「こんなに働く人が少なくては……。どうしたらいいのか……。そうだ、子どもやお年よ、り、女の方へおねがいしよう。」

しかし、農家の人たちは、自分たちの畑仕事もしなければならぬので、なかなか首をたてにふる人はいませんでした。こまった健二さんは、

「作業がおそくなるが、畑仕事が終わる秋から冬に手伝ってもらおう。」

と考えました。健二さんは、このことを伝えるためにまた一けん一けんの家をまわって頭を

下げました。健二さんのこうした姿に、地いきの人たちは、健二さんといっしょにクロマツをうることにしました。

戦争がやっつと終わると、健二さんに新しい問題がおきました。そのころ、三沢海岸の砂浜に質のよい砂鉄が大量にあることがわかりました。砂鉄会社の代表者が、健二さんにこう言いました。

「みなさんが、せっかくうえたクロマツ林を切るのは、とてもつらいですが、何とか国や県のために砂鉄をほらせてください。」

高さ一メートルに育ったクロマツ林をおしたおして、その下から砂鉄を



ほるといのです。

健二さんは、思いなやみました。そして、決めました。

「国の計画であつても、私たちの生活を守るクロマツ林を切ることに、ぜったい反対です。」

健二さんは、なかまといつしよに何度もはんたいの理由を話しに行きました。

「わかりました。砂鉄をとつたらかならず会社の方でせきにんをもつてうえ直します。」

健二さんのじょうねつに会社の代表者は、こうやくそくしてくれました。

三十四年の年月をかけ、北は東通村から南は八戸市へと、太平洋岸の約百キロメートルの砂地に緑のクロマツ林ができあがりました。そして、三沢の北浜地区では、八百ヘクタール（野球場約六百個分）もの田畑が開かれ、作物がくれるようになります。そして、人々の生活が豊かになりました。健二さんは、何度も何度もうなずきながら、遠くまで続くクロマツ林を見つめていました。

その後、健二さんや防災林づくりにかかわった多くの人たちのために、下北の尻屋崎に、『砂地に緑を』という文字がぎざまれた記念碑がたてられました。

※飛砂：砂浜の砂が飛ぶこと。砂が田畑に積もると作物ができなくなる。

虫おくり

いよいよ、今日はわたしたちの虫おくりパレードです。

先頭には、お父さんたちが杉のえだやわらで作った大きな虫、その後には、^{※1}太刀^{たち}ふり、^{※2}荒馬^{あらま}、ふえ、たいこなどのぎょうれつが続き、虫おくり保存会^{ほぞん}の人たちといっしょに学区内をおどって歩きます。

「ピーシヤララ、シヤララ。」「ドンコドンコ、ドドン。」

ふえとたいこの合図で、全校いっせいにおどり始めました。虫おくりの出発です。わたしは、心がうきうきして、ピョンピョンとびながらはりきって太刀をふりました。カッコーン、カッコーンと太刀のぶつかる

音が青空にひびいて、みんなとても楽しそうにおどっています。道路わきで見ている人たちも、大きなはく手をしてくれました。



「虫おくりは、田んぼや畑の作物にわるい虫がつかないように、みんなできょうりよくしておいはらい、お米などがたくさんとれるようにおいのりする大事な行事ですよ。」と教えてくれた、お母さんのことばを思い出しました。わたしは、わるい虫をおいはらうぞと思つて、

「アツシー、アツシー、アツシーシーシー。」

と、大きなかけ声をかけておどりました。

でも、学校を出発して、進んでいくうちに、だんだん足がつかれてきました。太刀も重くなって、ふり上げるのが、たいぎになってきました。早く終わらないかなあと思ひながら、だらだらとおどっていたら、駅前の方でたくさんの人たちが、みんな楽しそうに一だんと大きなはく手をしてくれました。その中には、にこにこわらっているわたしのおじいさんもいました。

おじいさんの顔を見たたん、わたしは、ゆうべの話を思い出しました。

「むかしは、小学生でなく、村の青年せいねんだん団のわかものやむすめたちが、赤い着物を着ておどったもんだ。田植えのあとの大事なお祭りで、おじいちゃんも若いころ、太刀ふりをやったんだよ。でも、学区のわかものが、だんだん少なくなつて、虫おくりがや



れない時もあつたけど、今は、小学生たちががんばって、昔からの行事を守ってくれるから安心だ。」

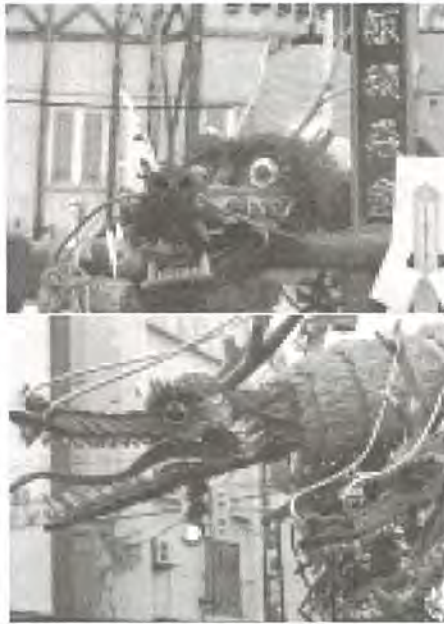
「お父さんは、虫おくりのふえやたいこの音を聞くと、なんだかほっとしてうれしくなるんだ。これからも、地いきにつたわっている昔からの行事を、みんなで協力して続けていきたいものだ。明日、がんばれよ。」

わたしは、おじいさんたちのことばを思い出して、また、元気よくおどりました。

パレードが終わって家に帰ったら、お母さんが、「今日はがんばったね。太刀^{たち}ふりじょうずだったよ。」

と言ってくれたので、とてもうれしくなりました。高学年になったら、ふえやたいこの役もやるこ

とができます。何日も前から練習をしなければならいので、とてもたいへんだと思いますが、わたしは、ふえにちょうせんしたいと思っています。そして、昔から続けているわたしたちの虫おくりを、いつまでも大切にしていきたいと思っています。



※1 太刀^{たち}ふり：五色の紙で、細長く切った飾^{かざ}りをつけた棒^{ぼう}（
m 〱 m 二十cm くらいの長さ）を、二人一組で打ち合わせ
ながらふり回る踊^{おど}りである。

※2 荒馬^{あらま}：農機具が普及^{ふきゅう}していなかった昔は、馬は農作業に欠
かせない大事な役目があった。馬に対する感謝と馬を上手
に使いこなせるようにとの願いを込めて、まん中が馬の役、
左右に馬の手綱^{たづな}を引く者の三人一組で、跳ね回りながら太
刀ふりの後に続いて踊^{おど}る。

おらほのゆうびんやさま

ゝ 齋藤大作 〵



岩手県に近い三戸町に、齋藤大作さんという人がいました。齋藤さんは、ゆうびん配達の仕事を支十六年間も続けた人です。

齋藤さんが配達する地いきは、三戸のゆうびん局から遠くはなれた所が多く、中には、山おくの一けん家もありました。道が悪く、バイクでもむりなけわしい山道を齋藤さんは、「足」を使って八十才まで配達一すじに生きてきました。

齋藤さんが、初めて仕事についたのは、明治四十四年（一九一一年）で、三戸町にまだ電とうがついていなかったころです。齋藤さん

は、おうふく四十キロメートルの道のりを歩いてゆうびん物をとどけました。ゆうびん物には、手紙のほかに小包^{こづみ}などもあり、さらに新聞も配達^{はい}するので、重いかばんのほかにリュックもせおって歩かなければなりませんでした。

ゆうびん配達の仕事は、土曜も日曜ありません。雨の日も風の日も続^{つづ}けました。

「みんなが、わしを待っているからな。雨がふっても風が強くても行かないわけにはいかない。」

というのが、齊藤^{さいとう}さんの口ぐせでした。

配達の中、大きな犬におそわれて、ズボンをやぶかれたこともありました。でも、手紙だけは守らなければと、必死^{ひし}になつてにげました。

前の日から雪のふり続いた寒い日のことでした。列車^{れっしや}がおくれたため、ゆうびん物がおくれてとどきました。二、三日前から少しかぜをひいていた齋藤^{さいとう}さんは、

「今日は、ねていたいな。でも、わしが休めば、みんながこまるだろうな。」

と思い、がんばって行くことにしました。家族の人たちが、配達の中で、具合が悪く

なったら大変だと止めても、齋藤^{さいとう}さんは行くことをやめませんでした。齋藤^{さいとう}さんは、少しでも早くとどけようとにぎりめしを食べながら配達^{はいたつ}しました。

山おくの人たちは、齋藤^{さいとう}さんが来るのをまっています。

「むすめさんから、手紙っこ来てるよ。」

と言って手紙をわたすと、おばあさんはうれしそうな顔をして、

「本当かい。齋藤^{さいとう}さん、すまないけど、いつものように読んでくれないかい。」

と言いました。そのころは、文字が読めない人や書けない人がまだいたのです。齋藤^{さいとう}さんは、そういう人たちのために手紙を読んであげ



たり、時には、かわりに返事を書いてあげたりしました。

村の人たちは、齋藤さんと会うことを楽しみにしていました。手紙をもらうことばかりでなく、町の様子やできごとが聞けるからです。天気が悪い日は、道のとちゅうまで出むかえてくれる人もいました。

いつのまにか村の人たちは、齋藤さんのことを『おらほのゆうびんやさま』とよぶようになりました。

このようにして、齋藤さんは五十六年間もみんなのためにはたらいたので、りっぱな賞じようとメダルをもらいました。

齋藤さんは、いつも、次のように話していたそうです。

「わしの生きがい、手紙や新聞をとどけて、村の人たちによるこんでもらうことでした。八十才になるまで、長い間続けることができたのは、みんなのおかげです。」

花なき枝に実はならぬ

徳差藤兵衛

寛政五年（一七九三年）、東津軽郡筒井村（現在の青森市）に生まれた藤兵衛。貧しい生活をしていたけれども、だれよりも孝行者で、大変働き者であつた。りっぱな人であつたため、二十八歳の時に庄屋となつた。

ちようどその頃、隣の幸畑村の小泉久兵衛は、八甲田山から水を引いて筒井の原野を開拓しようとしたが、失敗していた。これを聞いて、以前から筒井村原野の荒れ果てた様子に心を痛めていた藤兵衛は、近くの横内川から水を引いて、新堰（新しい用水路）を通すことを代官に申し出た。一度は願いをはねのけられたが、その話を聞いた家老が、「普通の人にはできないことをすすんでやるとは、めずらしい。私がお奉行様に話しましょう。」

と言ってくれた。その計画を出したところ、奉行は、あまりの精密な計画にすっかり感心し、許可することにした。知らせを聞いた藤兵衛は、うれしくてすぐに近くの村々



の人々を集め、

「皆さん、土地を開墾し、新堰を作り、実り豊かな土地にしましょう。」
と言った。ところが、農民の中には、

「何を言っているんだ。」

「ばかりけている。水をせき止めるだなんて。」

「そんなことをしたら水が流れてこなくなる。われわれの村はどうなるんだ。」
と言つて、工事を中止するようにせまる者もいた。

しかし、籐兵衛は考えを変えなかった。そして、荒川・横内川・駒込川の水質を調べることにした。まず、三つの川から水をくんできて、十二本ずつ苗を栽培してみた。秋になって、駒込川の水で育てた稲は四本減り、横内川の水では十八本に増え、荒川の水では倍の二十四本になった。新堰をつくるには荒川の水が最適だとわかったが、籐兵衛は、地理的に便利な横内川から取り入れることに決めた。相変わらず近くの農民から、
「もしも用水堰ができれば、こっちの村は水が減ってしまう。」

「他人が勝手に入ってきて、我々の土地の権利をとってしまう。」

と猛反対された。籐兵衛は、そのようなことはないと何度も説明したが、頑として聞き



入れてもらえなかった。

近くの村の農民たちの中には、ついに、書類で時の家老にこれを止めるように願い出る者もいたが、家老からは、

「籐兵衛の事業は、地域のために必要である。だから、引き下がってようすを見てみよう。」

と言われた。これにはまわりの農民たちもはげしく怒り、

「我が村に害を与えるのは、籐兵衛だけだ。どんなことがあつてもやめさせよう。」

と言い、工事を何度も妨害した。命をねらわれそうになったこともあった。籐兵衛は、そのたびに、ますます決意をかたくしていった。

文政五年（一八二二年）、まわりの村の農民たちの抵抗にも負けず、幅約四メートル、長さ四キロメートルの新堰がみごと完成させたのである。

晩年ばんねんの籐兵衛とうべえは、人としての手本を人々たちに示し、くらしていた。家は裕福ゆうふくであったが、質素しつそにくらし、身なりは、一見普通いけんの人と同じであったという。

花なき枝には実はならぬ

（花が咲かないと実はできない。実ができるまでの努力（過程）が大事である。）

籐兵衛は、右のような自作の歌を掲げ、自分を戒めるとともに、常に村民にも言い聞かせていたという。

籐兵衛のつくった新堰にいぜきは、今は、『籐兵衛堰』と呼ばれ、筒井桜川つついさくらがわから八ッ橋やつはしのおよそ八百ヘクタールの土地をうるおす水源すいげんとなっている。

※1 庄屋しょうや…いくつかの集落をまとめる

役目をする村の代表者。

※2 戒めいましめ…過ちあやまちのないように教えること。



徳差籐兵衛をたたえる碑ひ

チエスボロー号の遭難

ゝ国境を越えた勇氣と人間愛ゝ

明治二十二年（一八八九年）十月三十日の早朝、現在のつがる市車力の沖合で風速六十メートルを越える嵐に見舞われ、一隻のアメリカの大型貨物船チエスボロー号が遭難した。

当時、日本は、五つの港が外国船に開かれ、その中の函館港をめざす多くの外国船が青森県周辺の海を往来するようになっていた。しかし、欧米諸国との不平等条約によって、外国人の犯罪を日本では裁くことができず、明治十九年（一八八六年）には、イギリス船ノルマントン号が和歌山県沖で遭難した際、イギリス人の船長が、イギリス人の乗務員を全員救出したのに対し、同乗していた日本人を一人も救出しなかったにもかかわらず、無罪となるという事件が起こった。当時は、このように日本人を蔑視する扱いに対し、外国人への怒りの感情が高まっていた時期であった。

チエスボロー号は、荒波と暴風によって浅瀬に乗り上げて座礁し、ただ沈没を待つだけだった。向こうに見える岸をめざして救命ボートを使い、何とか脱出を試みる乗組員も高波にさらわれ、すぐに海にのみ込まれた。

「あんな所さ、でっけえ船がいるぞ。」

今にも沈みしそうな大きな船を発見した地元の漁師たちは、流されている乗組員を救おうと急いで荒れ狂う海へと救助に向かった。漁師の娘は、村役場まで走って知らせに行った。漁師たちは手綱を握り、命の危険を承知の上で小さな船を巧みに操りながら、流木につかまっていた二人を救い上げた。運よく自力で岸までたどりついた者もいたが、ほとんどの乗組員は次々と襲いかかる波と、凍るよう



チェスボロー号^{そうなん}遭難事件の様子を描いた絵

に冷たい津^つ軽^{がる}の海にその姿を消していった。

「まだあそこに人がいるじゃ。」

瀕^{ひん}死^しの乗組員を波間に見つけるやいなや、岸で見っていた一人の若者が無^む我^が夢^む中^{ちゅう}で海へ飛び込み、最後の生存者を救い出した。こうして、やつとの思いで四名の乗組員を荒^{あら}海^{うみ}から救出することができたのである。

漁師の娘の知らせで大勢集まった村人たちは浜で火をたき、食べ物や着物を用意し、助かった見知らぬ外国人達を手厚く介^{かい}護^ごした。けれども、最後に助けられたヘンリー・ウィルソンは、長く冷たい海に浸^ひかったせいで、低^{てい}体^{たい}温^{おん}症^{しょう}となり、命の危険にさらされていた。

「もつと火をたけ。」

ただぼう然と見ていた人たちも、燃やせる流木や枯^かれ枝がないかどうか、近くを探し回って、急いで持ってきた。

「死ねば、まいねよ。」

「せつかく助かったのに。けっぱれ。」

村人たちは、冷えてしだいに動かなくなるヘンリーの体を必死でこすりながら励まし続けた。

その時であつた。一人の女性が人目を気にせず着物を脱ぎ、大男のヘンリーをまるでわが子のように抱きしめた。それは、高山稻荷神社の工藤吉衛門の妻はんだつた。はんは、冷たくなって動けない人を助けるには、人肌で温めるのが一番よいことを知っていたのだ。じつと

ヘンリーを温めているはんの姿は、まるで聖母のように見えたと伝えられている。こうして、ヘンリーは数時間後、その体に赤みを取りもどし、ようやく一命をとり留めることができた。

その後、海岸には次々と乗組員が流れ着くものの、すでに命が尽きた人たちばかりであつた。村人たちは助かった四名の外国人たちをばげましながら、少しでも役に立とうと動き回つた。外国人たちが、卵が好きだと聞くと、自分たちが食べる物も不足しているという貧しい暮らしであつたにもかかわらず、貴重な卵をおしげもなく持つてきては振るまつた。魚より肉を食べると聞くと、飼っているにわとりまで差し出した。外国人たちは、それを喜んで食べた。また、村一番の物知りと言われた巡査は、外国語は話せなくても、有名な外国人の名前などを一生けん命話しかけてチェスボロー号が、アメリカの船であることをつきとめた。

しかし、このまま医者もない、言葉も通じない状態でいては困るだろうと、村長が県庁に知らせて応援を頼むことにした。当時は、電話も交通手段もなく、村で一、二を競う俊足自慢の二人の若者が、車力村（現在のつがる市）からおよそ六十四キロメートルもある青森市の県庁まで走ることになつた。村を午後三時に出て県庁に着いたのは夜中の十二時であつた。知らせを聞いた県庁からは、医師と通訳が派遣されることになつた。



今を活躍の若者の二人の
（つがる市高山展望台）
伝えるレリーフ



アメリカ・バス市までの距離を泳ぎきろうと始まった水泳駅伝

つがる市になった今も、この交流は続けられている。

通訳が村を訪れてからは、互いに言葉や意思が通じ合うことをたいへん喜んだ。村人たちは、あの嵐の中を生きぬいた四名の船乗りたちを讃えはげました。生き残った四人は、村人たちにありとあらゆる感謝の気持ちを伝えた。

その後、すっかり体調が回復した四人は、別れをおしみながら故郷のアメリカへと帰って行った。残念ながら命を落とした他の乗組員たちは、故郷へ帰ることはかなわず、村人たちの手によって近くのお寺に手厚く葬られた。

チェスボロー号の遭難事故は、大自然の驚異に翻弄され、十九名もの命が失われた忌まわしい事故ではあったが、いっしか国境を越えた純粋な人間愛に満ちた実話として語り継がれ、人々に勇気と感動をもたらしてくれた。

事件から百年後、村では盛大に遭難者のための慰霊祭を行い、慰霊碑を設けて犠牲者の魂を弔うとともに、先人の偉大な勇気を讃え、全人類が助け合う平和な世の中を祈願した。また、旧車力村と米国メイン州バス市は姉妹都市となり、積極的に交流が行われるようになった。



アメリカ・バス市との国際交流事業（つがる市HPより）



100年の節目に建てられた慰霊碑

星の博士 はくし

ゝ 一戸直蔵 いちのへなおぞう ゝ

「ぼくは、大きくなったら学者になるんだ。」

とさけんだのは、明治十年（一八七七年）に西津軽郡木造町（現在のつがる市）で生まれ、吹原小学校を一番よい成績で卒業した一戸直蔵でした。

しかし、

「百しように、勉強はいらない。」

とくり返す父は、とうとう小学校の上の高等小学校（現在の中学校）へ行くことを許してくれませんでした。

「農業をやつても、好きな勉強はできる。」

直蔵は、田や畑の仕事を手伝いながら、ひまを見つけては本を読みました。ある日のことです。いつものように、仕事の合間に本を読んでいると、

「本は、病気やけがをして仕事ができないときに読むもんだ。」

と、すぐく父にしかられました。でも、直蔵は本が読みたくてたまりませんでした。とうとう、直蔵はかぜをひいたふりをして、本を読み続けたのです。

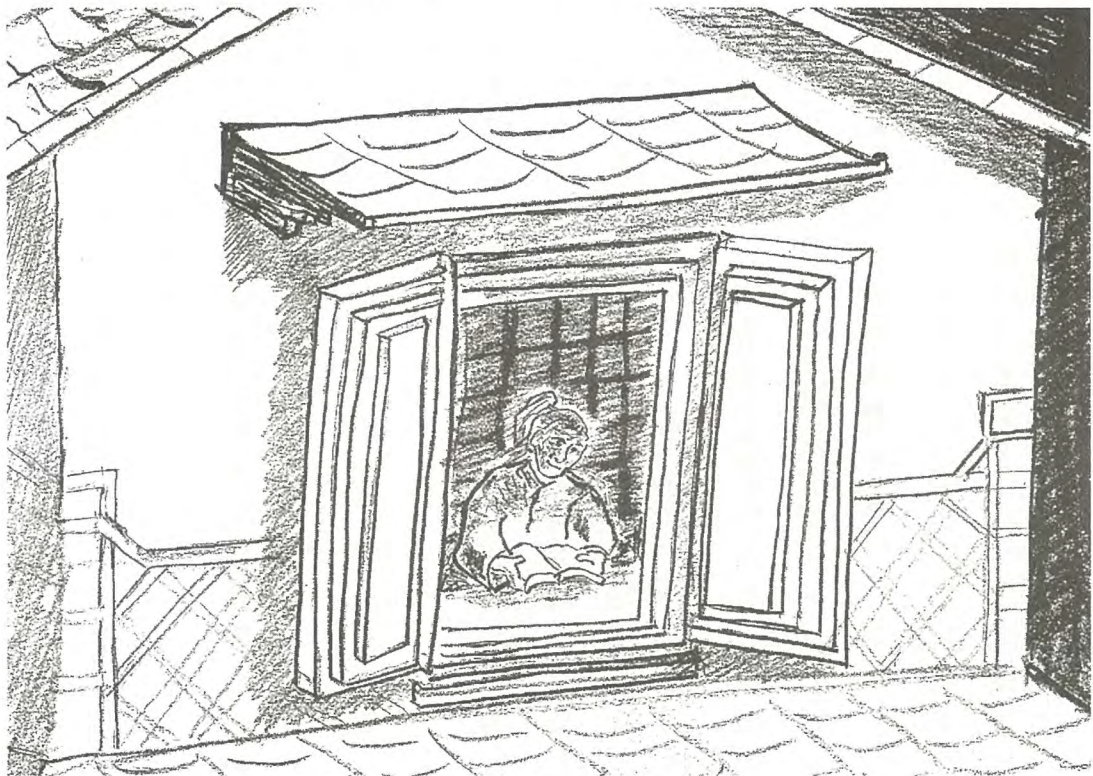
月夜のぼんには、家族がねむってから土蔵に入り、小窓からさしこむ光をたよりにし

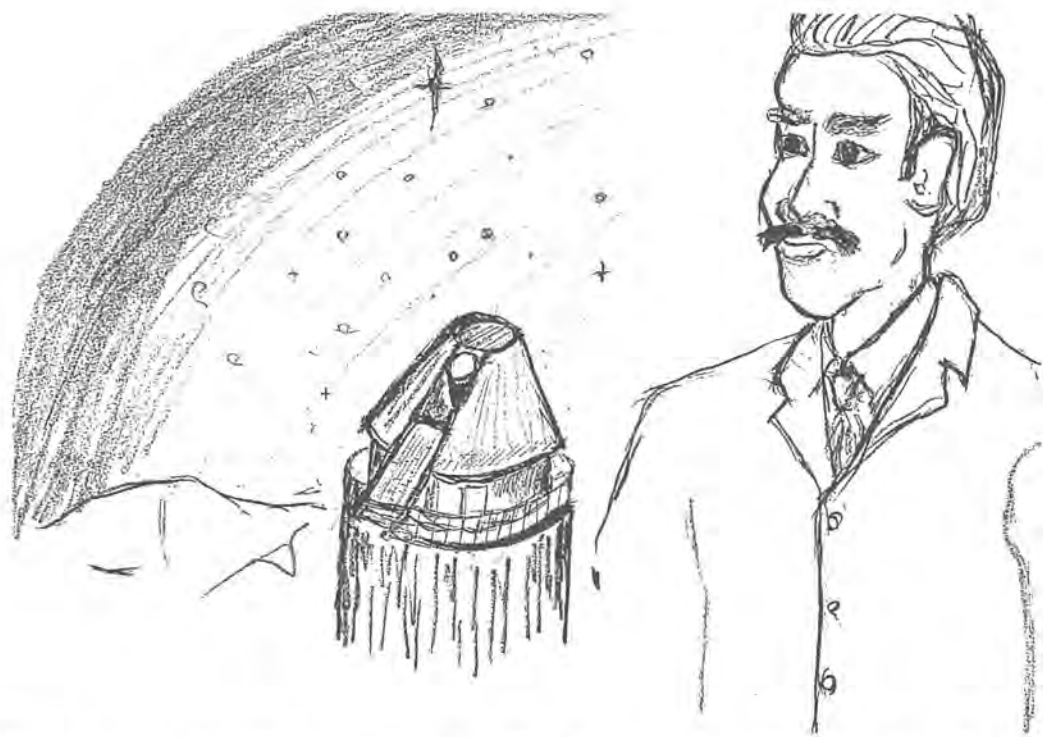
て本を読んだり、冬には、小学校の先生の家へ行つて、勉強を教えてもらったりしました。

このようにして、四年間、直蔵^{なおぞう}は農業の仕事を手伝いました。しかし、もっと勉強をしたいという気持ちをおさえることができませんでした。そこで、父の許しをえな
いで、とうとう家をとび出してしまったのです。

そして、弘前市の東奥義塾^{とうおうぎじゅく}（現在の東奥義塾高等学校）という学校に入学しました。お金は、母とおじさんがこっそり出してくれました。

東奥義塾を卒業した直蔵は、宮城県仙台^{みやぎ せんだい}市の第二高等学校に入学しました。でも、お金がかかりすぎるといふ理由で、むりや
り吹原^{ふきはら}へ連れもどされてしまいました。





しかし、その後、直蔵なおぞうの勉強好きがようやくまわりのみんなにもわかり、父がお金を出してくれることになりました。

再び、第二高等学校で勉強した直蔵は、仲間たちに、

「見ろ、一戸いちのへがまたころがつているぞ。変なやつだ。」

と、よく悪口を言われました。直蔵は、晴れた夜は、かならず校庭にごろりとあおむけにねころび、望遠鏡を両手でささえ、星を見つめていたからです。

さらに、直蔵は、東京大学に入り、星の勉強をしました。そして、立派な成績で卒業した後、アメリカに渡り、星の研究を続けました。

どんな苦しいことがあっても、心に決めたことに向かって一生けん命がんばった直蔵は、青森県で初めての理学博士はくしになったのです。

手製の赤十字旗

三上剛太郎

下北郡佐井村出身の三上剛太郎が、軍医として満州（今の中国の東北部）に行ったのは、日露戦争が起こった明治三十八年（一九〇五年）一月のことであった。

日本から出発する時、母が、

「おまえの務めは、負傷した兵隊さんの手当てをすることです。しっかりとがんばるんですよ。」

と別れの言葉を言うと、剛太郎は、

「私が生きて帰ることができなくなっても、悲しまないでください。」

と言って、母の手をかたくにぎりしめた。

剛太郎が行った病院は、満州（現在の中国）の黒溝台のあたりで、一月には、れい下三十度にもなる寒い所にあつた。

剛太郎はここにある病院で、病気の兵士や負傷した兵士の看病と治りようにあたることになった。そこには、鉄ぼうのたまで腕や足を負傷した者、熱のため動けない者など、合わせて七十四名の兵士たちがいた。

さらに、ロシア兵も一人いた。ロシア兵は足を負傷していた。日本兵が、そのロシア



兵を殺そうとしたとき、剛太郎は、

「けが人を殺してはいけません。けが人には敵も味方もないのです。私は医者です。私の務めは、病人やけが人を救うことです。」

と、きっぱり言った。ロシア兵は、剛太郎の手をにぎりしめた。目には、光るものがあつた。

一月二十七日の真夜中のことであつた。ロシアの大軍が黒溝台^{ミコウダイ}を中心にとり囲み、おしよせてきた。雪がちらちら降つて、地平線のかなたから、軍馬^{ぐんば}のいなく声が聞こえてきた。

日本兵たちは鉄ぼうを持って、ロシア軍のいるやみの中に走っていった。雪の降り積もっている野原の向こうで、激しい鉄ぼうの音がしばらく続いていたが、まもなく聞こえなくなった。

さらに、軍馬のいなく声が近付いてきた。(日本軍は全めつしたにちがいない。このままだとみな殺しにあう。)と剛太郎は思った。

もう、この病院には、まともに戦える兵士はいなかった。それでも兵士たちは鉄ぼう





をとって立ち上がろうとした。

「待ちなさい。命をそまつにしてはいけません。」

「軍医どの、敵が目の前まで来ているのだ。止めないでくれ。」

剛太郎は、兵士たちの顔をじっと見つめていたが、やがて、きつぱりと言った。

「よし、いちかばちかやってみよう。だれか三角きんを持ってきてくれ。」

剛太郎は針と糸を使って、二枚の三角きんを一枚にぬい合わせ、赤い毛布を十字に切り取って、それにぬいつけた。

もう、夜が明けてきていた。ロシア軍が、すぐそばまでおし寄せて来ているのが見えた。剛太郎は、手製の旗を棒にくくりつけた。

「よし、でき上がったぞ。ロシア兵を連れてきてくれ。」

剛太郎は、負傷していたロシア兵に肩をかし、手製の赤十字旗を右手に持って、ロシア軍の一団に向かい、雪の中を歩き始めた。七十四名の負傷兵たちはかたずをのんで、剛太郎の行く手を見つめていた。

とつ然、ダダーンという鉄ぼうの音がして、たまが飛んできた。二人は雪の中にふせた。剛太郎は立ち上がり、負傷兵に再び肩をかして、歩き始めた。ロシア軍は、剛太郎の持っている赤十字旗を見

つけた。隊長らしいコサック兵が一団の先頭に立っていた。剛太郎は、

「今、我が日本軍は七十四人います。全員が負傷し、熱で動けない者もいます。どうか、七十四人の命を助けてやってください。」

と、ロシア兵を通して言い、雪の上に正座し、深く頭を下げた。右手にはしっかりと、赤十字旗がにぎられていた。これに続けて、ロシア兵は、
「私は、三上軍医どのに、負傷した時から今日まで、ずっと看病していただきました。どうか、軍医どのがおっしゃることを聞いてあげてください。」

と、たのんだ。

ロシア軍の隊長は、しばらく、赤十字旗を見つめていたが、ゆつくりと剛太郎の前に進み出て、彼の手を取り、
「どうかお立ちください。敵、味方と分けへだてなく負傷兵を救おうとするあなたの態度に、私は強く心を打たれました。」

と言った。

こうして、剛太郎の手製の赤十字旗によって、七十四名の取り残された日本軍の負傷兵たちの命は救われた。

この時の旗は、後に、赤十字社発足百周年記念祭が、スイスのジュネーブで行われた際、歴史的な資料として出品され、各国の代表に深い感めいを与えた。



「第二章

読み物資料の活用例」

ぼくの そだった まち うまんが家 馬場のぼる

(低学年4―5)

一 ねらい

のぼるさんのいつまでも変わらない故郷への思いを通して、自分の住んでいる地域に親しみ、愛着をもつ心情を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

自分の育った郷土は、自己の形成に大きな役割を果たすとともに、一生にわたって大きな精神的な支えとなるものである。遊びや生活科などの学習を通して、家庭や学校を取り巻く自然や住む人々に目を向け、触れ合いを深めることで、郷土に親しみをもち生活しようとする心情を育てたい。

(2) 資料の概要

代表作「十一ぴきのねこ」で知られる三戸町出身の漫画家、馬場のぼるは、幼い頃から絵をかくのが大好きだった。特に、三戸町の風景画をよく描き、その頃に好きだった風景が漫画や絵本の中に描かれている。漫画家になってからも故郷の絵を描き続ける主人公馬場のぼるの気持ちをを通して、ねらいに迫っていききたい。

三 展開例

- まち探検で何を見つけたか。
- 何枚も絵をかいていたのぼるさんは、どんな気持ちだったのか。

- ・ 絵をかくのは、たのしいな。
- ・ みんなに見てほしいな。うまくできたぞ。

- まちの風景のどんなところが気に入っていたのか。

・ 山の形がかっこいいな。

・ れつ車を通るよ。乗ってみたいな。

・ おいしそうなりんごが実ってきたな。

- ◎ 「わたしがえがく絵は、いつもなぜか三戸の風景になってしまふ」と言ったのは、どうしてか。

・ 生まれ育ったまちがなつかしい。

・ きれいな景色が忘れられない。

・ 自分の見たすてきな風景をたくさんの人に伝えたい。

- 自分の住むまちのいいなあとと思うところはどこか。

■ 文部科学省HP『心のノート(1・2年)』の「あなたがそだつ 町」(八十八、八十九頁)を読み、「すてきなところをしようかいするしんぶん」(九十、九十一頁)に記入する。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 導入では、生活科のまち探検と関連させ、自分たちの住む地域の様子について自由に話し合わせる。

・ 展開において、挿絵や写真を提示し、主人公の気持ちに共感させることで、地域の自然や住んでいる人とのつながりに気付かせる。

・ 主発問では、故郷を離れても、自分が育った地域のことをいつまでも思い続ける主人公の気持ちに気付かせる。

・ 青森県文化観光立県宣言記念イラストは、導入や終末などいろいろな観点から活用できる。

【写真提供】株式会社こぐま社、三戸町教育委員会

がんばれの 気持ちをとどける (低学年4―(2))

一 ねらい

被災地のために一生懸命に大豆づくりをするひろ子さんたちの行動を通して、働くことのよさを感じて、みんなのために働こうとする心情を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

本資料は、主人公が震災の被災者のために、自分たちのできることを考え、進んで活動することで、働くことのよさを感じる設定である。

低学年の時期は、みんなのために働くことを楽しく感じている児童が多い。その発達の段階を踏まえ、困っている人の役に立つうれしさや充実感に共感させ、進んで働くことのよさについて考えさせる。

(2) 資料の概要

主人公のひろ子は、三月十一日の東日本大震災を小学校一年生で経験した。住んでいる地域では、大きな被害はなかったが、被災地の様子や被災者の生活の様子に心を痛めた。

二年生になり、大豆を育て豆腐にし、それを売ったお金を被災地の学校に届けることになった。ひろ子は、被災地の人のために畑の草取り、豆腐販売や募金の呼びかけに一生懸命取り組んだ。

お金が届けられた学校からは、感謝の気持ちのこもった手紙が届けられた。

三 展開例

○ 学校や家庭での自分の仕事は何か。

・ 黒板ふき。お皿ふき。

○ ひろ子さんが地震の様子を見て、テレビの前で動けなくなっただけはどうしてだろう。

・ 地震で町がめちゃくちゃになっていたから。

・ 地震のあった所の人が大変だと思ったから。

・ この後、どうやって暮らしていくんだろうと思ったから。

◎ 草取りしてるひろ子さんは、どんな気持ちだったのだろう。

・ 大変だけど、がんばろう。

・ 休まず草取りをしないと、たぐさんの実がならない。

・ 地震で困っている人のためにがんばらなくては。

○ 手紙を読んだひろ子さんは、どんな気持ちになっただろう。

・ がんばったかいがあった。

・ 苦しくても、大変でも、やってよかった。

・ 地震で困っている人のためになれてうれしい。

■ 文部科学省HP『心のノート(1・2年)』の「大切な それぞれの しごと」(七十八頁)を記入し、発表後、教師の説話を聞く。(他の人のために、働いた経験を話す。)

四 指導上の留意点及び工夫

・ 東日本大震災の様子について、その時の被災地の位置やその様子、被災者の生活について簡単に説明するようにしたい。そうすることで、被災者のためにがんばろうと決意する主人公の心情に共感させることができる。

・ 展開例において、豆腐販売や募金をしている時の主人公の心情について考えさせ、被災地からの手紙を読んだ時の充実感に共感させることもできる。その際には、豆腐販売の日の活動だけではなく、それ以前の継続した草取りなどの活動の大切さについて、考えさせるようにする。

かにさん（低学年3—(2)）

一 ねらい

かにの子を助けてあげようとしたきんべえの姿を通して、身近な自然に親しみ、動植物に優しく接しようとする心情を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

この時期の児童には、特に身近な自然の中で遊んだり、動植物の飼育栽培などを経験し自然や動植物などと直接触れたりすることを通して、それらに対するやさしい心を養うことが求められる。また、自分の身近な動植物に対しては、強い興味や関心をもっているが、必ずしもその生命の大切さに気付いているわけではない。

本資料を通して、きんべえがかにの子を助けてあげようとした心情と、自分の命が助かったときのおちよの心情を考えさせ、ごくありふれた身近な事柄を生命と関連付けてとらえるようにすることで、生命に対する不思議さやかけがえのなさを感じ取っていきけるような心情を育てていく。

(2) 資料の概要

本資料は、きんべえという男が、小さな子がににも命の尊さを感じて助けてあげたことが、自分の娘を助けることにつながる。娘のおちよも命の尊さに気付いていくという話である。本資料の中で、きんべえが小さなかにの子を助けてあげようとした心情と、自分の命が助かったときのおちよの心情を考えさせていくことにより、命の大切さや、自然や動植物を愛し大切にすることが育てたい。なお、本資料は平成七年三月に青森県教育委員会が発行した道徳郷土資料に掲載さ

三 展開例

れたものを改訂したものである。

○ どうしてきんべえさんは、かにを助けてあげようと思ったのだろう。

・ かにがかわいそうだったから。

・ 生き物が好きだったから。

○ 小さくても、命をもっているものと思ったから。

・ きんべえさんはご飯を食べないで、どんなことをなやんでいたのだろう。

・ 娘のおちよをりゅうじんのよめにしなくてはいけなくなつたこと。

・ 娘の命を助けたいと思っていたこと。

・ 娘にすまないと思っていたこと。

◎ おちよは、かにたちが助けにきた時、どんなことを考えただろう。

・ おとうさんがかにの子の命を助けてあげたから、来てくれたんだ。

・ かにさん、がんばって。

・ どうして、かにが助けにきたんだらう。

■ 文部科学省HP『心のノート（1・2年）』の「生きものをそだてよう」（六十、六十一頁）を活用し、いろいろな生きものの命について考えさせる。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 児童に資料を渡して教師が範読していくという方法ではなく話を読み聞かせながら、黒板全体を使って資料を作り上げるという方法を用いることで、児童の資料に対する興味を高め、意欲を持続させるようにする。また、おちよの気持ちを吹き出しにしたワークシートを用い、言葉を考えさせることで、登場人物の心情を共感的にとらえることができるようにする。

先生があんだ手ぶくろ　　川村郁　（低学年2―4）

一　ねらい

手ぶくろをあんでくれた川村先生に対して、「ありがとう」と言った子どもたちの姿を通して、日頃世話になっている人々に感謝しようとする心情を育てる。

二　資料の特質

(1) 資料の生かし方

自分が生活できるのは自分一人の力ではない。周りの多くの人々の世話を受けながら、生活していることに気付かせ、世話をしてくれる人々の自分に対するやさしい心遣いや、温かく差し伸べられた手に素直に心を動かし、感謝する気持ちをもたせたい。そこで、終末部分で川村郁先生に感謝する子どもたちの姿に共感させることによって、ねらいとする価値に迫ることができる。と考える。

(2) 資料の概要

本資料は、へき地教育の母と言われた「クララ 川村郁先生」が津軽の開拓地にあった分校において、教育の情熱を燃やしていた昭和三十年頃の「手袋」の逸話を題材としている。貧しい環境の中で、手袋を持っていない子どもたちに自分のセーターを編むために持っていた毛糸で手袋を作り、やさしく世話する川村郁先生の姿が描かれている。

なお、本資料は、平成七年三月に青森県教育委員会が発行した道徳郷土資料に掲載されたものを改訂したものである。

三　展開例

○ みんなの世話をしてくれる人にはどんな人たちがいるか。

・ お父さん、お母さん。

・ 先生、技能主事の〇〇さん。みどりのおばさん。

○ 山の子どもたちは教室に入ってどんな気持ちになったか。

・ 外はとても寒かったから、あったかくてうれしい。

○ 川村先生はどんな気持ちで手ぶくろを編んだだろうか。

・ 手ぶくろがない子どもたちに早く編んであげたい。

・ 寒いのに手ぶくろがないなんてかわいそうだ。

◎ 山の子どもたちは、どんな気持ちで「ありがとう」と言ったか。

・ 手が冷たくならないよ。手が温かい。ありがとう。

・ みんなに作るのは大変だったと思うけど、ありがとう。

■ 文部科学省HP『心のノート（1・2年）』の「ありがとうをさがそう」（四十八―五十一頁）を活用する。

四　指導上の留意点及び工夫

・ 低学年は、大人から世話を受けずにはいられない存在であっても、改まって感謝することはめったにない。しかし、一方通行の愛情は偏ったもので、世話になる人たちへの尊敬と感謝の念をもつことは大切なことである。人の世話を当たり前としないで、ありがたいと感謝する気持ちを持ち、それを表すことによって、毎日の生活がうるおいのあるものになることを感じさせたい。

・ 川村先生の行為には「思いやり・親切」という価値が含まれている。「思いやり・親切」は自分が他人に能動的に接するときの心の在り方であり、「感謝」は主として人から受けたことに対する心の在り方である。ここでは、「思いやり・親切」を強調し過ぎず、子どもたちの気持ちに焦点を当てて取り扱いたい。

世界一になるために　　斎藤春香　（中学年2―③）

一　ねらい

チームづくりのために取り組んだ斎藤春香さんの姿を通して、集団の中で互いに理解し、信頼し、助け合おうとする心情を育てる。

二　資料の特質

(1) 資料の生かし方

この段階においては、これまで以上に友だちを意識し、相手の反応に敏感になる。自分の居場所を求め、集団から疎外されるのをおそれて、相手を傷つけないようにすることだけを重視する傾向が強くなっていく。相互の信頼の下に、切磋琢磨して互いに磨き合い、健全な人間関係を育てていく手がかりとしたい。

(2) 資料の概要

本資料は、北京オリンピックで金メダルを獲得した女子ソフトボールチームの監督の斎藤春香さんが、チームづくりのために取り組んだ『ミーティング』を中心に構成されている。

その中で、バントを失敗した選手とそれを指摘する選手を取り上げ、チームが精神的に成長する姿が描かれている。

三　展開例

○ チームワークとは、どういうことだろう。

- ・ 仲よくすること。
- ・ 優しくすること。
- ・ 協力すること。

- ・ 信頼すること。

○ この話の中のどこにチームワークが表れているのだろうか。

- ・ アドバイスをしたところ。
- ・ がんばる約束をしたところ。
- ・ いっしょに練習をしたところ。

◎ 「何で今日の試合でバントでできなかったの。」と、質問したことについてどう思うか。

- ・ ひどいと思った。
- ・ かわいそうだと思った。
- ・ 勇気があると思った。
- ・ 信頼していると思った。
- 本物のチームワークに必要なことは何だろう。
- ・ お互いに信頼し合う気持ち。
- ・ 厳しさ。

■ 文部科学省HP『心のノート（3・4年）』の「学び合い　ささえ合い　助け合い」（五十二、五十三頁）を読み、自分の所属するチーム・集団のチームワークを高めるために、自分ができることをノートに書かせる。そして、それがなかなかできない自分にも互いに共感させ、乗り越えなければならぬ課題を明確にもたせる。

四　指導上の留意点及び工夫

・ 本資料に一貫したテーマは「思いやりのある厳しさ」である。厳しさの奥に隠れている「相手を思う気持ち」を見せられるような工夫をして、見えない世界を見せてあげたい。

砂地に緑を 防災林をつくることに一生をかけた人

石橋健二 (中学年1―2)

一 ねらい

自分の目標に向かってあきらめず植林に取り組んだ主人公の生き方を通して、自分でやろうと決めたことは粘り強くやり遂げようとする心情を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

中学年になると、最後までやり通すことの大切さが分かってくる。しかし、なぜ、最後までやり通すことが大切なのか理解している児童は少ない。本資料では、主人公の心情の変化に焦点を当てることを通して、やり通すことができた理由を考えさせたい。また、子どもたちが深く道徳的価値を自覚するために、四年生の社会科「郷土を開く」と関連付けて指導していきたい。

(2) 資料の概要

ヤマセ、飛砂、津波の多い環境に悩まされていた三沢の海岸沿いに住む人々。人々に豊かな生活をと砂浜にクロマツ林をつくろうと決心した石橋健二。しかし、砂浜にクロマツを植えることの難しさや戦争、砂鉄の採掘など、数々の困難が襲い掛かる。これらの困難にあっても、自分の目標に向かってあきらめずに植林に取り組んだ。そして、ついに三十四年の年月をかけて、東通村から八戸市までの百キロメートルの砂地にクロマツ林をつくることに成功した。

三 展開例

○ 戦争が始まり、一軒一軒お願いに行く健二さんをみんなはどう思うか。

・ せっかく五年もかけて考えたのに……。かわいそうだ。
・ みんなの豊かな生活のために、ここまでして、すごい。

○ 高き一メートルに育ったクロマツ林を押し倒して、砂鉄を掘りたいという話を聞いたとき、健二さんはどんな気持ちになっただろう。

・ 今までみんなで頑張って植えてきたことが無駄になる。
・ やはり、浜の人々の暮らしのために反対するのは当然。

○ 三十四年をかけて完成したクロマツ林を見て、健二さんはどんなことを思っただろう。

・ 今まで努力してやってきたことが、ついに達成できた。
・ 人々の暮らしが豊かになる。あきらめないでよかった。

◎ 三十四年間やり通すことができたのは、健二さんにどんな思いがあったからだろう。

・ みんなに豊かな生活をしてほしいという願いが強かったから。
・ みんなの協力を大切にしたいから。

・ あきらめたら、今までの努力が水の泡となるから。

■ 文部科学省HP『心のノート(3・4年)』の「続けるひけつは？」(十八頁)を活用することもできる。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 導入で昭和八年当時の生活の苦しさが分かる資料(図鑑など)を提示することにより、石橋健二の強い思いに気付くことができるように工夫したい。

・ 心情曲線で戦争などの困難にあった時やクロマツ林が完成した時の健二の心情の変化を表すことにより、視覚からも中心価値に気付かせることができる。

・ 前もって資料を渡し、内容を理解させることにより、子どもたちは、意欲的に価値を追究するであろう。

虫おくり（中学年4—5）

一 ねらい

地域の虫おくりパレードに参加し、伝統行事を守り引き継いでいこうとする「わたし」の気持ちを通して、郷土の行事などに進んで参加し、郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心情を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

この時期の児童は、活動的で行動範囲も広くなり、身近なものへの興味・関心が高まってくる。しかし、郷土のすばらしさに気付いたり、地域の行事に進んで参加したりする意識においては個人差が大きく、親や学校等の働きかけに応じて参加した児童も、伝統的な行事に対する気持ちに深いものがない場合もある。そこで、「ほめられるから」「おもしろいから」等の参加理由から一歩進んで、父母、祖父母等の願いを知り、地域の人々の生活、伝統行事等の素晴らしさにふれることによって、「伝統行事を守り、引き継いでいこうとする気持ち」「自分たちの町っていいな」という、郷土を愛する気持ちを育てていく指導が必要であると考ええる。

ここでは、「わたし」の気持ちに共感させながら、地域の伝統的な行事に積極的に関わろうとする意欲や郷土を大切にしようとする心を学ばせたい。

(2) 資料の概要

本資料は、地域の「虫送り保存会」の役員である祖父から聞いた話をもとに、伝統行事に参加した体験を書いた児童作文を再構成したものである。

地域の虫送りパレードに参加した「わたし」は、始めははりきって太刀振りをやっていたが、だんだん疲れて踊るのがいやになってくる。しかし、大きな拍手をしてくれる人々やにこにこしている祖父、父母たちの願いを知ることによって

三 展開例

より積極的に参加し、大切に受け継いでいこうという気持ちになるという話である。なお、本資料は平成七年三月に青森県教育委員会が発行した道徳郷土資料に掲載されたものを改訂したものである。

○ 「虫おくり」のパレードが発売したとき、「わたし」はどんな気持ちだったか。

・ はりきって踊ろう。悪い虫を追い払おう。

○ だんだん疲れてきた時、「わたし」はどんな気持ちだったろうか。

・ 早く終わらないかなあ、もう踊りたくない。

◎ なぜこんなことをするのかあ。やらなければよかった。おじいさんやお父さんの言葉を思い出した「わたし」はどんなことを考えたか。

・ 虫おくりは昔から続いている行事だからがんばろう。

・ 豊作を祈る大事な行事だ。元氣よく虫を追い払おう。

・ 私たちが頑張つて、見ている人たちを安心させよう。

・ おじいさんたちに喜んでもらえるよう疲れてもがんばろう。

○ お母さんに「がんばったね」と言われたとき、わたしはどんな気持ちになっただろう。

・ 疲れてもがんばつてよかった。次は笛に挑戦したい。

・ 虫おくりの行事をこれからも大切にしていきたい。

■ 文部科学省HP『心のノート（3・4年）』の「わたしのふるさとを心に残そう」（九十、九十一頁）を活用し、ふるさとのよさについて考える。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 終末では、「虫送り保存会」の人の話を聞かせると地域の人の願いや期待が児童の心に響いて効果的である。「虫おくり」に限らず、自分たちの地域で伝統行事に関わっている人々の話や父母、祖父母の願いを聞かせる等の工夫をすること、自分たちへの期待が印象深く残る。

【写真提供】奥津軽虫と火まつり実行委員会

おらほのゆうびんやさま　ゝ齋藤大作ゝ（中学年2―(4)）

一　ねらい

村の人たちの齋藤さんに対する思いを通して、生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもち接しようとする心情を育てる。

二　資料の特質

(1) 資料の生かし方

中学年の段階においては、感謝する対象を、自分たちの生活を支えている様々な人々へと広げる指導が求められる。特に、自分たちの生活のために働く人々や、長く自分たちの生活を築き、支え、努力を重ねてきた高齢者に対して、尊敬と感謝の念をもって接することができるようになることが大切である。

(2) 資料の概要

本資料は、三戸町の山間部を中心に、五十六年間もの長期にわたって郵便配達一筋に生きた齋藤大作の話である。大作は、その仕事ぶりと人柄から村人の間で「おらほのゆうびんやさま」と呼ばれていた。本資料には、勤労、責任感、努力等の価値も含まれているが、大作を「おらほのゆうびんやさま」と呼ぶようになった村の人たちの思いから、主題に迫りたい。

なお、本資料は平成七年三月に青森県教育委員会が発行した道徳郷土資料に掲載されたものを改訂したものである。

三　展開例

○ 日頃、みんなが「ありがたい」と思う人はどんな人か。

・ お母さん。

・ お父さん。

○ 齋藤さんはどんな人だと思うか。

・ がんばりやさん、まじめな、やさしい人だ。

○ 齋藤さんは、村の人たちに何を届けていたのだろう。

・ 大切な家族の手紙。

・ まちの様子や出来事などの話の楽しさ。

・ 優しさや思いやりの心。

◎ なぜ、村の人たちは、齋藤さんのことを「おらほのゆうびんやさま」と呼ぶようになったのだろう。

・ 天気が悪くても風邪をひいても、手紙を届けてくれるから。

・ いろいろな話をして楽しませてくれるから。

・ 手紙を読んでくれたり、返事を書いてくれたりするから。

・ 何十年も続けて、自分たちのところに来てくれたから。

○ 自分たちの生活を支えている人とは、どんな人だろう。

・ 技能主事の〇〇さん。

・ 地いきの祭りのためにがんばっている人。

■ 文部科学省HP『心のノート（3・4年）』の「みんなにささえられてるわたし」（四十八〜五十一頁）に記入する。

四　指導上の留意点及び工夫

・ 社会科と関連させることによって、自分たちの生活を支えている様々な仕事について思い出させたり、本資料に関わる時代背景についてイメージをもたせたりする。

・ 中心発問では、「ゆうびんやさん」と「ゆうびんやさま」の違いについて考えさせる。

・ 自己の生活を振り返る場面では、生活を支えている人を挙げるだけでなく、その人に対する気持ちも引き出すようにする。

花なき枝に実はならぬ　　徳差籐兵衛　　（高学年4―7）

一　ねらい

周囲の反対にも負けず荒れ果てた土地を開墾しようとした籐兵衛の姿を通して、郷土を大切に思い、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心を育てる。

二　資料の特質

(1) 資料の生かし方

児童は、自分たちが生活している郷土のすぐれた伝統や文化、豊かな自然に囲まれて生活していながら、あまりにも日常の中に溶け込んでいるため、それに気付かないことが多い。そこで、自分の命を狙われても、それに屈することなく、最後まで地域のために信念を貫いた主人公の気持ちに焦点を当てることで、郷土に対する認識を深め、郷土に関わろうとする心を育てていきたい。

(2) 資料の概要

貧しい家に生まれながらも、まじめに働き、何よりも人を大切にする徳差籐兵衛。筒井村の荒れ果てた姿を悲しみ、開こうと考える。そのためにまず、用水堰をつくることにした。しかし、近隣地域の人々からの猛反対を受けるだけではなく、身の危険にもさらされることになった。

三　展開例

- 用水堰をつくる計画を奉行から許可されたとき、籐兵衛はどんな気持ちになっただろう。
- ・ やっとやりたかったことが実現できる。
- ・ これで、村も作物が育つ。

- 近隣の農民から工事を中止するように言われたとき、籐兵衛はどんな気持ちになっただろう。

・ これからの地域のためにも、ここでくじけてはいけない。もう一度、みんなを説得しよう。

- ◎ 工事に危害を加えられたり、命をねらわれたりしたとき、籐兵衛はどんな気持ちになっただろう。また、あきらめなかったのはなぜだろう。

・ このままでは殺されるかもしれない。死んだら元も子もない。いつそ、やめてしまおうか。

・ ここまでやってきたのだから、どんなことがあってもやり通そう。

- 今までどのように地域とかかわっていたか。

・ 清掃活動。

・ 町をきれいにしたい。

- 文部科学省HP『心のノート（5・6年）』の「見つめようわたしのふるさと　そしてこの国」（百四、百五頁）を活用し、ふるさとのよさについて考えさせる。

四　指導上の留意点及び工夫

- ・ 資料の内容を理解させるために、場面絵、川や地域の様子が分かるような地図や籐兵衛の記念碑の写真などを随所に盛り込んでいく。

・ 自分の命を省みず、人々のために努力した先人がいる所に、生きていくことのすばらしさと、ずっと昔からつながっていることに気付かせたい。

・ 古い時代の内容なので、児童が理解しにくい言葉が多く出てくると予想される。資料を読みながら補説していく。

【参考資料】『筒井町誌』・『青森市史 別冊 人物編』

チェスボロー号遭難 ～国境を越えた勇気と人間愛～

(高学年2—(2))

一 ねらい

チェスボロー号遭難事件における乗組員の救助活動やその後の活動にかかわった人々の行動を通して、誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にしようとする心情を養う。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

本資料は、津軽の先人たちが、たとえ外国人であろうと目の前で遭難している人々を何とかして助けたいという気持ちから献身的に行動し、消えかけた四名の命を救った実話である。この資料から、人間同士、勇気をもって助け合うことの大切さやすばらしさに気付かせたい。また、生命尊重、国際理解と親善などを考える資料としても活用できる。

(2) 資料の概要

「チェスボロー号遭難事件」は、一八八九年十月、現在のつがる市車力沖合で起こった出来事である。アメリカの大型帆船「チェスボロー号」が嵐の中浅瀬に乗り上げて座礁し、乗組員二十三名のうち十九名が命を落とすという痛ましい海難事故であった。そんな中で四名の命が、たくさん集まった地元の住民たちの懸命な救助活動により救われた。住民たちは貴重な食料や衣服を持ち寄り、言葉も通じない四名の外国人を懸命にもてなしたそうである。また、救助された乗組員の冷えきった体を人肌で温めて介抱した工藤はんの行動、通信手段も発達していない中で医師や英語教師の派遣を依頼するために、二人の若者が県庁のある青森市まで走っていったことなど数々のエピソードが語り継がれている。

三 展開例

ー ドが語り継がれている。

○ あなたは困っている人を勇気をもって助けた経験はあるか。また、うまく助けてあげられなかった経験はあるか。

○ チェスボロー号の遭難に際し、誰がどんなことをしたか。

◎ (漁師、娘、村の人々、工藤はん、巡査、二人の若者など) 救助や支援にあたった人々は、それぞれどんな思いで活動したのだろう。

・ どうにかして遭難している人たちを一人でも多く助けたい。

・ 自分ができることなら、ぜひ協力したい。

○ もし自分がこの場にいたとしたら、どんなことができるだろう。

・ 海には入れないけれど、たき木を集めて暖めてあげたい。

・ 英語で話しかけて、元気づけてあげたい。

■ 文部科学省HP『心のノート(5・6年)』の「あなたの心にあるそのあたたかさ」(四十四～四十七頁)を読んで、相手への思いやりの心の伝え方、受け止め方を記入する。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 五年生の教材として扱うのであれば、社会科の郷土の暮らしや先人たちの苦労や知恵にも関連させながら、資料に対する関心を高めさせたい。

・ 六年生の教材として扱うのであれば、社会科で日本の歴史を学ぶ際に登場するペリーの来航と函館の開港、不平等条約、わずか三年前に起きているノルマントン号事件と関連させながら、時代背景や歴史的事象を踏まえ、決して豊かではなかった暮らしの中での津軽の人々の行動のすばらしさを深く感じさせたい。

【写真提供】高山稲荷神社、つがる市

星の博士　　一戸直蔵　（高学年1―2）

一　ねらい

一途に学問の世界に向かう主人公の生き方を通して、より高い目標を立て、希望と勇気をもつてくじけず努力しようとする心情を育てる。

二　資料の特質

(1) 資料の生かし方

高学年は、児童それぞれに夢をもち、それに向かって行動しようとする時期であるが、夢と現実との違いを意識するなど、幾つもの困難に出遭いくじけそうになることがある。この資料から理想に向かって着実に前進していこうとする強い意志と実行力が大きな力となることを感じ取らせたい。

(2) 資料の概要

本資料は、現在のつがる市吹原出身の一戸直蔵が学問の世界に魅せられ、父に反対されながらも信念をもって学問の道貫き通し、青森県で初めての理学博士になるまでをまとめたものである。幾多の困難に遭いながらも挫折せず、一途に学問の世界に向かう一戸博士の真摯な姿勢や、それを陰で一生懸命支えてくれる叔父や母や先生の温かさにも共感させ、やり遂げることの大切さを学ばせたい。

なお、本資料は平成七年三月に青森県教育委員会が発行した道徳郷土資料に掲載されたものを改訂したものである。

三　展開例

○ 自分がやると決めて、やり通してよかったと思うことはあるか。

- ・ 鉄棒の逆上がりの練習をしたら、できるようになった。
- ・ 漢字テストで満点を取った。

○ 心に強く感じたところはどこか。

- ・ かぜをひいたふりをしてまで本を読んだところ。
- ・ 月の光で本を読んだところ。
- ・ アメリカに行って、星の研究を続け、理学博士になったところ。

○ 直蔵は、父に本を止められたり、高等小学校に行くことを許してもらえなかったとき、どんな気持ちだっただろう。

- ・ なぜ、本を読んではいけないのだろう。
- ・ もっともっと勉強したい。

◎ 父がお金を出してくれることになったとき、どんなことを考えただろう。

- ・ これでやつとまた好きな勉強ができる。
- ・ 勉強ができるのは、周りの人のお陰だ。
- 途中でくじけそうになったことを乗り越えて続けていることはあるか。

- ・ マラソンが不得意でいつもやめたいと思っているけれど、最後までがんばって走っている。
- ・ そろばんや習字などの習い事。

■ 文部科学省HP『心のノート（5・6年）』の「夢に届くまでのステップがある」（十六～十九頁）を活用することも考えられる。

四　指導上の留意点及び工夫

- ・ 自分でやろうと決めたことを粘り強くやり遂げるためには、幾多の困難にぶつかっても負けないで乗り越えようとする自らの強い意志と、それを見守る温かい支援者が必要である。
- ・ 指導においては、当時の時代背景を踏まえつつ、自分でやり遂げた時の充実感や成就感を、新たな意欲を引き起こす原動力とし、目標に向かって自主的に取り組む姿勢へと発展させたい。

手製の赤十字旗　↳三上剛太郎↳（高学年3―(3)）

一　ねらい

戦場に赤十字旗を掲げた三上剛太郎の行動を通して、人間のもつ心の崇高さに感動し、畏敬の念をもとうとする心情を育てる。

二　資料の特質

(1) 資料の生かし方

高学年の段階においては、人間のもつ心の崇高さや偉大さに感動したり、真理を求める姿や自分の可能性に挑戦する人間の姿に心を打たれたりすることを通して、それらに畏敬の念をもつことが求められる。三上剛太郎の姿から、人間としての在り方を深いところから見つめ直すことができるようにしたい。

(2) 資料の概要

本資料は、日露戦争時代、酷寒の満州に渡った下北郡佐井村出身の三上剛太郎が、軍医として敵味方関係なく、負傷兵を手当てするだけでなく、ロシア軍からの弾丸や砲弾が行き交う中、三角巾などを用いた手製の赤十字旗によって、多くの命を救ったという史実をもとにした資料である。医者としての信念を貫き、行動した剛太郎の崇高な生き方を感じとらせたい。

なお、本資料は平成七年三月に青森県教育委員会が発行した道徳郷土資料に掲載されたものを改訂したものである。

三　展開例

- 三上剛太郎と赤十字旗の写真を見て、日露戦争でどんなことをした人だと思うか。
- ・ 赤十字に関係がありそうだ。

- この話を読んで、どんなことが心に残ったか。

- ・ ロシア兵が殺されそうになったとき、助けてあげたこと。
- ・ みんなの命を救うために、赤十字の旗を作ったこと。

- ・ ロシア軍の隊長に、剛太郎の思いが通じたこと。

- ◎ どんな気持ちで剛太郎は、こういう行動ができたのだろう。

- ・ 人の命を救うことが医者だということを忘れない気持ち。

- ・ 戦争をしている相手も、同じ人間であると思う気持ち。

- ・ 命を守るために、どんな状況でもあきらめない気持ち。

- 人物の生き方で感動した本やドラマはなかったか。

- ・ 幕末、新しい日本をつくろうとした坂本龍馬の生き方。

- ・ 黄熱病の研究のために尽くした野口英世の生き方。

- 文部科学省HP『心のノート（5・6年）』の「大いなるもの息づかいをきこう」（七十二、七十三頁）を読む。

四　指導上の留意点及び工夫

- ・ 社会科の歴史学習に関連させることによって、日露戦争に関わる時代背景について確認する。

- ・ 「戦時においても、赤十字の旗を掲げている病院や救護員は攻撃してはいけない」と決めているジュネーブ条約について補足する。

- ・ 日露戦争後、剛太郎が故郷の佐井村に戻り、晩年まで、地域の人々のために医者として尽くしたことについて触れる展開も考えられる。

【映像提供】RAB開発

小学校第5学年及び第6学年	中学校
1 主として自分自身に関すること	
(1) 生活習慣の大切さを知り、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛ける。	(1) 望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け調和のある生活をする。
(2) より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。	(2) より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ。
(3) 自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする。	(3) 自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任をもつ。
(4) 誠実に、明るい心で楽しく生活する。	
(5) 真理を大切にし、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。	(4) 真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく。
(6) 自分の特徴を知って、悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす。	(5) 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する。
2 主として他の人とのかかわりに関すること	
(1) 時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。	(1) 礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。
(2) だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にする。	(2) 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。
(3) 互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。	(3) 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。
	(4) 男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。
(4) 謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にすること。	(5) それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、寛容の心を持ち謙虚に他に学ぶ。
(5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。	(6) 多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる。
3 主として自然や崇高なものとの関わりに関すること	
(1) 生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。	(1) 生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する。
(2) 自然の偉大さを知り、自然環境を大切にすること。	(2) 自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。
(3) 美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。	
	(3) 人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きることにより喜びを見いだすように努める。
4 主として集団や社会とのかかわりに関すること	
(1) 公德心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切にしながら進んで義務を果たす。	(1) 法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。
	(2) 公德心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める。
(2) だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。	(3) 正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める。
(3) 身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。	(4) 自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。
(4) 働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。	(5) 勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める。
(5) 父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。	(6) 父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。
(6) 先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくる。	(7) 学級や学校の一員としての自覚をもち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する。
(7) 郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。	(8) 地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める。
	(9) 日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に努めるとともに、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する。
(8) 外国の人々や文化を大切にする心を持ち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。	(10) 世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。

○「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表

小学校第1学年及び第2学年	小学校第3学年及び第4学年
1 主として自分自身に関すること	
(1) 健康や安全に気を付け、物や金銭を大切にし、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。	(1) 自分でできることは自分でやり、よく考えて行動し、節度のある生活をする。
(2) 自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う。	(2) 自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。
(3) よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。	(3) 正しいと判断したことは、勇気をもって行う。
(4) うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。	(4) 過ちは素直に改め、正直に明るい心で元気に生活する。
	(5) 自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす。
2 主として他の人とのかかわりに関すること	
(1) 気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。	(1) 礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。
(2) 幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。	(2) 相手のことを思いやり、進んで親切にする。
(3) 友達と仲よくし、助け合う。	(3) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。
(4) 日ごろ世話になっている人々に感謝する。	(4) 生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。
3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	
(1) 生きることを喜び、生命を大切にすることをもち。	(1) 生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする。
(2) 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。	(2) 自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にすること。
(3) 美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。	(3) 美しいものや気高いものに感動する心をもつ。
4 主として集団や社会とのかかわりに関すること	
(1) 約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にすること。	(1) 約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。
(2) 働くことのよさを感じて、みんなのために働く。	(2) 働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。
(3) 父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。	(3) 父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくる。
(4) 先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。	(4) 先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合って楽しい学級をつくる。
(5) 郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。	(5) 郷土の伝統と文化を大切に、郷土を愛する心をもつ。
	(6) 我が国の伝統と文化に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心をもつ。

平成24年度 道徳教育指導資料「郷土資料にかかわる実践事例集」【小学校編】

作 成 委 員

青森市立大栄小学校	校 長	中村茂子
青森市立浜田小学校	教 諭	柿崎美穂子
五所川原市立中央小学校	教 諭	成田春彦
大鰐町立大鰐小学校	教 諭	佐藤信孝
おいらせ町立木ノ下小学校	教 諭	増尾敏彦
佐井村立佐井小学校	教 諭	中村徳郎
五戸町立五戸小学校	教 諭	後藤真樹子
東青教育事務所	指導主事	斉藤直樹
西北教育事務所	指導主事	坂本朋子
中南教育事務所	指導主事	長尾朗
上北教育事務所	指導主事	繁在家康文
下北教育事務所	指導主事	山本敦
三八教育事務所	指導主事	薦川誠

なお、次の者が編集に当たりました。

青森県教育庁学校教育課	課 長	成田昌造
青森県教育庁学校教育課	学校教育企画監	伊藤直樹
青森県教育庁学校教育課	総括副参事	中谷保美
青森県教育庁学校教育課	主任指導主事	中村隆人
青森県教育庁学校教育課	指導主事	木村文宣